

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）  
 大学院生研究  
 2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学 研究科		英米文学 専攻	
指導教員	所属・職名			氏 名			
	文学部・教授			藤 卷 明 印			
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>			個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 名		
研究課題名	超越性と反超越性という視点から見たワーズワスの想像力についての考察						
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年			氏 名			
	文学研究科・英米文学専攻・博士課程後期課程1年			高 井 美 紀 子 印			
研究組織	在籍研究科・専攻・学年			氏 名			
研究期間	2007年度						
研究経費	200千円						

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

2007年度は2つの中心軸を定めて研究活動を進めた。一つ目は、2006年度に提出した修士論文“From Sense to Imagination: A Study of Wordsworth’s Transcendentalism”を土台として研究を進め、国内外の学術誌に投稿することであり、二つ目は、Wordsworthの Prelude 研究に着手するためのテーマ設定をすることであった。前者に関しては、“The Creative Power of Sense: Wordsworth’s Quest for the Origins of Poetic Imagination”として立教大学の紀要である『英米文学』No.68に掲載され、またその過程で修士論文執筆時には看過していた問題点や新たな切り口を発見することができ、実りの多いものとなった。後者に関しては、Prelude における風の表象というテーマを立ち上げ、それに従ってテキストの精読と、関連する批評や参考文献の収集、読解を進めているところである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 想像力 ] [ 感覚 ] [ 超越 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

まず、『英米文学』No.68 に掲載した紀要論文“The Creative Power of Sense: Wordsworth’s Quest for the Origins of Poetic Imagination”の執筆に伴う成果について報告する。この論文の大筋は、本論文の土台となった修士論文“From Sense to Imagination: A Study of Wordsworth’s Transcendentalism”と同じく、ディコンストラクション批評以降自明のものとなった、イギリス・ロマン主義における感覚・自然、すなわち非超越に対する、想像力、すなわち超越という二項対立を見直すというものであり、Wordsworth における想像力とは、自然や感覚的世界から遊離して存在しているものではなく、逆に自然や感覚的世界を土台としたものであるという結論も修士論文とほぼ同じであった。だが、これを学術論文として発表するには、その大筋と結論を変えることなく、修士論文段階で未解決であった二つの問題点を解決することが課題となった。

一つ目の、Prelude 第 6 巻のシンプロン峠越えの箇所“*I was lost as in a cloud*” (Prelude 6, 529) という一節の解釈で、修士論文の段階では、私はこの一節はシンプロン峠越えをしている過去の時点での Wordsworth の心境であると解釈していたが、指導教授の指摘を受け、批評なども読んだ結果、それは Prelude を執筆している時点での Wordsworth の心境であると解釈する方が正しいと分かった。シンプロン峠越えにおけるこの一節を含む想像力論の箇所は、Wordsworth の Prelude における一つのクライマックスであり、Wordsworth 研究の要ともなる重要な箇所なので、この段階では、誤りの指摘を受け該当箇所を削除することにし、その解決は今後の課題とすることにした。

二つ目の問題は、‘Lucy Poems’ という詩群に登場する Lucy という少女と、‘There was a Boy’ という詩に登場する少年が、同じく大人にならないうちに死んでしまう理由として、彼らが自意識以前の感覚段階にある存在で、言語を解さず直接自然と繋がっている段階にいるからであり、そのような段階に留まり続けるためには人間としての成長を否定しなければならないからであると主張したが、その主張の援用のために、Jonathan Bate というエコ・クリティシズム批評家による‘Michael’論を用いたため、Lucy や少年が自然との直接的結びつきの代償として成長を拒否し死んでゆくのに対し、なぜ Michael 老人は大人になっても自然との直接的結びつきを失わずにいられたのという矛盾が生じてしまったことであった。それゆえ、‘Lucy Poems’ や ‘There was a Boy’ と ‘Michael’ が別次元の世界を扱った詩であることを証明するという課題に直面することとなった。そこで、‘Michael’ という詩の副題である ‘A Pastoral Poem’ の Pastoral という側面からこの詩を考察すると、それは Pastoral という言葉が示すように、現実のように見えながら現実ではない虚構の世界、一種のユートピアを描いた詩であると言えるだろうと考えた。そして、このユートピアが近代産業資本主義の波に揉まれて消えてゆくという ‘Michael’ のプロット自体、近代社会は決して Pastoral な世界を内包し得ないという Wordsworth の意識の現われに他ならないと考えた。そして、Wordsworth の詩の世界には失われた子ども時代という個人的な喪失のモチーフと並行して、近代社会が葬り去った Pastoral な世界という集合意識のレベルでの喪失のモチーフが存在するのではないかという可能性を提示した。後者の集合意識のレベルでの喪失のモチーフについては、当該論文の本筋とは直接関係しないので触れるに留めておいたが、このことは、Wordsworth の詩の世界における個人的体験・意識と歴史的・集合的意識との繋がりの問題という、かねてから私の関心のあったテーマへ取り掛かるための糸口を与えてくれるものとなった。

この論文の発表により、Wordsworth における、感覚対想像力というディコンストラクショナル的二項対立に揺さぶりをかけ、それを切り崩す足掛かりを作るという当初の目的は一応の達成を見た。しかし Wordsworth の詩の言語において何が感覚に相当するものであり何が想像力に相当するののかという問題に関しては未だ具体例に乏しく、その実証的研究は今後の課題となる。

次に、2007 年度に新たに着手した研究である Prelude における風の表象の研究について報告する。イギリス・ロマン主義詩人達は想像力のメタファーとして風のモチーフを彼らの詩の中にしばしば登場させており、この想像力のメタファーとしての風という概念

**研究成果の概要 つづき**

は、イギリス・ロマン主義の批評史においても異論のない解釈だと言ってよい。私はこの風の表象を詳しく分析することによって、なぜイギリス・ロマン主義詩人が風を想像力のメタファーとして用いたのか、またイギリス・ロマン主義における想像力の性質というものを捉えることができるのではないかと考えている。Wordsworth の Prelude にも様々な風のバリエーションが登場する。その代表的なものを列挙すると、普通名詞で breeze, wind, tempest, blast, gust, zephyr, air、固有名詞で Eolian, Sirocco などがある。このような風の多様なバリエーションは、Prelude において刻々と変化を続ける極めて動的なものである。私は、Prelude におけるこの風の変化に着目し、象徴的なレベルでその変化が何を意味するのかを読み解こうとした。Prelude は印象的なそよ風 breeze の描写をもって始まるが、このそよ風は Prelude の冒頭のわずか 115 行の間において、Wordsworth の内面にあわせて tempest, silence へと劇的な変化を遂げる。このそよ風から嵐、そして無風への変化は自然界の循環を表し、それに対応する Wordsworth の内面もまた自然界と同じく循環していることを示す。この風の循環のモチーフは、Prelude の後半のフランス革命の劇的な描写においても変奏されて登場している。私は、この変奏された風の循環のモチーフに、人間の社会もまた自然界のリズムと同じく循環するのだという Wordsworth の認識が読み取れるのではないかという仮説を立てた。しかし、始めに結論ありきのこの仮説からは何も有益な結果を生み出すことはできなかった。そこで、この研究が行き詰まった理由を分析したところ、風の循環のモチーフにこだわるあまり、Prelude における他の重要なモチーフを排除してしまったためであるという結論を得た。Prelude には、風以外にも様々な象徴性を帯びた重要なモチーフが登場する。例えば、Prelude には、第 6 巻のアルプスのシンプロン峠越え、第 13 巻のスノウドン登山と、登山の場面が 2 回描かれている。風の変容が地上を舞台に描かれ、人間のコントロールを越えたものとして描かれるのに対し、登山という行為は、自分の足を一步一步確実にコントロールしながら天の高みを目指してゆく行為であり、実際 Prelude においてもそのように描かれている。このように、人間の意志の力を越えた風と人間の意志の力を象徴する登山のように、Prelude には相異なる意味を持つモチーフが数多く存在し、それらを多角的に分析することによって有益な視点が導き出されるのではないかと考える。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① Mikiko Takai, *The Creative Power of Sense: Wordsworth's Quest for the Origins of Poetic Imagination*, *The Rikkyo Review: Arts&Letters*, No. 68, 2008, pp. 35-53.

③ 第3回の英米文学研究方法論II、2007年10月20日、立教大学、発表題目：『ワーズワスの時間意識：『序曲』 (The Prelude) に吹く再生の風』